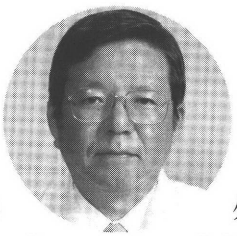
人との出会い ——大連医科大学との交流——

東京医科大学 外科学4講座
田渕 崇文



私は人との出会いが色々なドラマを生むものと常々感じている。2006年12月8日に第16回日中消化器外科学術交流会に参加するために上海市を訪れた。過去に幾度か中国を訪問していたが上海は初めてだった。中国経済の中心を担い、東京に劣らず大都会だと聞いていた。実際にそれを肌で感じたい思いの他に、兄弟のような付き合いをしている大連医科大学外科の胡教授と会うために参加した。私が想像していた上海とは違い、町並みや人々の生活環境はやや乖離していた。公衆衛生マナーは決して良いとは言えず、中国経済の中心で、なお国際都市上海を自負するには相応しくなく、もう少しマナー教育をするべきであると感じた。現地の方の話では、政府が高額な予算を上海市に投入し巨大都市計画を進めた結果、郊外や地方からの人々の移動、さらに貧富の差が生じ、町には物乞い者や違法商売が横行するようなった。彼らのマナー違反が社会問題となっている。急速な経済発展が車社会を招き、道路事情は悪く交通マヒで市当局は時間帯によっては上海ナンバー以外の車に市内乗り入れ制限をしているそうだ。そのため上海ナンバープレートを取得するために高額な金額を設定しているそうだ。ちなみに自家用車は40万元（日本円約60万円）、タクシーは50万元と聞いた。また最高級マンションの価格は15億円だそうだが、いまだに入居者がいないと聞いた。2000万人都市上海は共産主義国家とは到底思えない。この状況は20数年前に中国を訪れた時からは想像もつかない景観であった。

写真1：第16回中日消化器外科学術交流会
大連医科大学の消化器外科スタッフと胡祥教授（右端）

さて、私が中国を訪問したのは1983年で、当時の上司であった相馬哲夫教授以下3名で大連医科大学、中国医科大学（旧満州大学）を視察と講演をしたのが最初であった。中国の人々の服装は、人民服で、自家用車もタクシーもなく移動手段は歩行、バス、自転車、会社所有の車が走っている程度だった。日中国交が開かれてはいるものの、周囲に日本人を見かけなかった。安全のため外出には必ず職員が同行してくれたが、偏見かも知れないが、町に出ると背中に何か視線を感じた。しかし、朝の散策中に何人かの老人に「あなたは日本人ですか、私は小学校で日本人の先生に教わったのです。今は日本語もずいぶん忘れました。」とゆっくりした口調で日本語を話されたのには驚き、なんとなく安堵感を持った。その翌年大連医科大学付属第一病院（旧日本赤十字病院）と東京医科大学霞ヶ浦病院との友好交流が締結された。

写真2：1983年の大連市内中山公園

写真4：1985年の訪問時　柯若儀教授の通訳

写真3：1983年の大連市内

毎年、医師、看護師、事務職等の留学を受け入れ、また我々も講演訪問し現在も交流が続いている。

その第1回目の交流が1985年に始まり、私を含め医師3名、看護師2名がその任を命じられ大連を訪れた。現地での言葉、生活に不安を抱いていたが、2回目の訪問のためか幾分心に余裕ができた。食道静脈瘤の硬化療法の講演と治療の依頼もあり、内視鏡、その他治療に必要な道具と硬化剤を持参した。なにぶん当時の中国の医療状況は十分に把握されていなかったため、内視鏡のトランスが使えないことが判り、急遽中国医科大学から借りることとなった。中国語は喋れないし治療中の患者、放射線技師、看護師とのコミュニケーションを心配したが、日本語の流暢な循環器内科の柯若儀教授の通訳がすばらしく事なきを得た。彼女は、東京女子医専出身で、日本の歴史、日本人気質をよく理解された先生で、その出会いが今も続く私と大連医科大学との交流の契機となっている。医療設備、診断技術はお世辞にもすばらしいとは言えず、消化器レントゲン診断、内視鏡診断はお粗末なものであった。手術室の見学では、給食でよく使われるような大きなやかんで煮沸した水で手洗いしていたのには驚いた。しかし、消化器外科手術の基本的技術はすばらしく、スピーディーであった。その後柯教授から次のようなお話があった。「中国の医療は日本に比べ非常に遅れているでしょ。これは文化大革命の10年間に有能な医師を育てることが出来なかったからよ。私も地方に追いやられました。だから今、隣人である日本の医療技術をしっかり学ぶ努力をしているのよ。大連は日本人が創った町よ。」まるで母親のような口調で喋られ、感銘深かった。「折角中国に来られているから中国国内を旅行して日本に帰りなさい」と言われるままに甘え、大連に12日間滞在後、北京、西安の旅行を計画してくださった。

もう1人の出会いは当時29歳の若き消化器外科医、胡祥先生であった。中国医科大学時代、日本語を外国語として選択し、日本語クラスで勉強し、今後日本の医療を学ぶ運命の医師であった。我々の訪問は生きた日本語を勉強できる機会だからしっかり教わりなさいとの命で、大連滞在中は

写真5：1985年の大連医科大学付属第1病院手術室

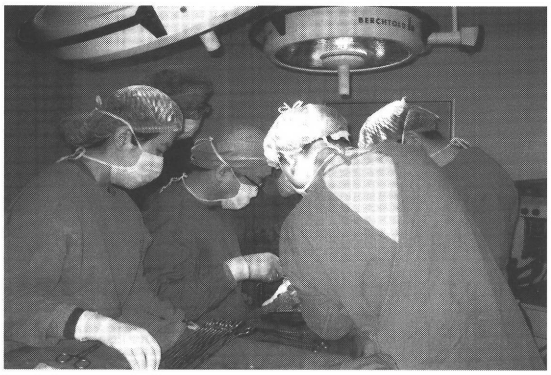


写真6：2006年訪問時の大連医科大学付属第1病院手術室

元より、北京、西安の旅行も通訳を兼ねて同行し、常に道中の安全に気配りし、私たちに満足してもらえるような真摯な態度には心打たれた。また、常に教科書を片手に、よく質問も受けたが、日本語を勉強していたのは印象的であった。お陰で順風満帆な旅を満喫できた。そのときまで中国を偏見視する傾向にあったが、実際、現地に赴き、多くの人と接し、目で見て、肌で感じたことから、もっと、彼らを理解しなければならないと思い帰国の途についた。この2人の出会いが契機となり、私と大連医科大学の医師との友好が親密になり、1989年、1991年、1999年、2001年、2002年、2004年、2006年に講演等で招聘され、大連医科大学付属第一病院を訪問する機会を得ました。訪れるたびに大連市の経済発展、病院の近代化には驚かされた。同時に貧富の格差も起こっていることも感じた。

一方、胡祥先生は大阪医科大学に大学院生として国費留学し消化器外科岡島邦雄教授の薫陶の下に医学博士となり、常に日本に学べ、追い越せの精神で消化器外科の知識と技術の習得に努力された。現在は大連医科大学付属第一病院外科の主任教授として活躍しており、2002年6月には初めて大連の地において第13回中日消化器外科学術会議を主催された。この日は日韓同時開催のサッカーワールドカップの日本戦もあり、学会中に途中経過を掲示し、また盛大な全員懇親会を企画され、我々日本人への持て成しに気が配られていることに感謝し、更なる両国の友好が築かれたと感じている。

柯教授は80歳を越えてもなお循環器内科医として臨床と教育に携わっておられる。彼女は訪問の度に大勢の前で中国の諺にある「中国では水を飲むときは、井戸を掘った人の苦労を忘れるな」と私たちに感謝の意を話された。また「中国と日本は政治的には色々な問題を抱えているが、医学を政治とは関係なく、両国の友好を継続しなければならない」と強い口調で話されたのには感銘した。この友好関係が永遠に続くことを願っている。